練馬大根・・・

かつて日本中の誰もが「練馬と言えば練馬大根」を真っ先に連想した時代がありました。遠く故郷でも練馬大根の名は轟いていました。

そんな懐かしい響きのある練馬大根が生まれた地が、「練馬春日町」駅の近く、愛染院周辺だと言われています。そして、その参道には「練馬大根碑」と、練馬大根の改良と普及に尽力した「鹿島安太郎翁顕彰碑」の２つの巨大な石碑が並んで立っています。

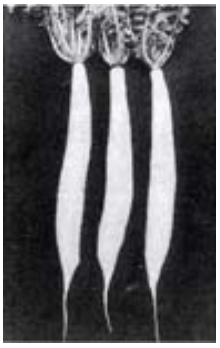
ところで、練馬大根の起源については、５代将軍綱吉説と篤農又六説の２つがありますが、「練馬大根碑」は見事に２つを合体させており、おそらく侃々諤々の議論を経たのだろうと想像されて愉快です。その部分を引用すると次の通りです。

将軍綱吉が館林城主右馬頭たりし時、宮重の種子を尾張に取り、上練馬の百姓又六に与えて栽培せしむるに起こると伝ふ。

もう少し詳しく書きますと、延宝５（１６７７）年、まだ将軍になる前の徳川綱吉（右馬頭：うまのかみ）が病気（脚気）に悩まされ、陰陽師に占いをさせたところ、「馬の字のつく土地で養生せよ」と告げられます。馬込や馬橋なども考えつつ、方角のいい練馬を選び、さらに、脚気に効くというので尾張から宮重大根の種を取り寄せて、その地の農民又六に作らせて食べたところ、体調はみるみる良くなった……という話です。

ところで、愛染院の鐘楼をよく見ると、その土台が沢庵石でできていることに気づきます。西側の壁に碑文が綴られています。それによると、梵鐘自身は１７０１年（元禄 14 年）創建のものですが、昭和２０年代後半、多くの練馬大根がモザイク病で壊滅的な打撃を受けた時、３００年の大根栽培供養のために、地元の春日町をはじめ、向山、田柄、貫井地区の農家が１軒につき３個ほどの沢庵石を持ち寄り、集まった大小５００余の丸石を高さ約３ｍ四方に積みあげて基壇にしました。

今や大根の主流は青首大根に取って代わられ、練馬大根は区が推進する育成事業として細々と栽培されているだけですが、毎年、希望者に種子が無料配布されますので、ご希望の方は栽培に挑戦してください。



数年前、近隣の農家で３ヶ月漬け込んだ昔ながらの沢庵をいただいたことがありますが、その強烈なしょっぱさに吃驚したことを思い出します。すっかり舌は昔の味を忘れていました。

それとともに、練馬大根の白くすらりとした本来の姿を知らずに、女の子をからかっていた無知な自分を恥ずかしく思い出しました。